

明代初期の八股文について (5)

The Eight-legged Essay in the early Ming Dynasty (5)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

③岳正

岳正（字は季方，号は蒙泉，諡は文肅。直隸順天府瀋縣の人。永樂十六年〔一四一八〕～成化八年〔一四七二〕。正統十三年戊辰科〔一四四八〕一甲三名（探花）の進士）。進士に及第して，編修を授けられ，天順の初めに，修撰に改められる。王翱の推薦をうけ，英宗（天順帝）に拝謁し，認められる。そしてその抜擢をうけて，原官のまま内閣に入るが，曹吉祥・石亨と対立し，肅州へ戍せられる。曹吉祥・石亨の失脚後，ゆるされて民となる。次の憲宗（成化帝）が即位すると，修撰に復職するものの，讒言をうけ，すぐに興化知府に転出させられる。そこでも讒言され，辞職する。その五年後に五十五歳で亡くなる。大學士の李東陽（天順八年〔一四六四〕甲申科の二甲一名の進士）と御史の李經（成化十四年〔一四七八〕戊戌科の三甲八十五名の進士）は娘婿にあたる。

俞長城は，次のように言う。

史に稱すらく蒙泉岳公（岳正） 高く自ら期負して謂う天下の事 爲す可からざる無し。文を爲して高簡（奥深くて簡約）峻拔（筆致が雄勁）にして，「古の作者を追う」（韓愈「與袁相公書」）。奇士と謂う可し。英宗（天順帝） 召見するの時，上殿し，善美 口を絶やさずと稱さる。古の布衣の立談して相の印を取る①と雖も，何ぞ比數するに足らん。曹〔吉春〕・石〔亨〕に困しみ，拷掠（拷問）され，謫戍さる。手梏（手梏）^{ママ てかせ}され，氣奔するも，九死に一生す。生生の知遇 忽爾（忽然）と反背し，「讒人は極まり^な 罔し」（『詩經』小雅・青蠅），絶えて痛む可きなり。夫れ才高き者は忌に遭うこと必ず深し，行潔なる者は謗を受けること必ず酷なり。先生（岳正）

の君に得るを以てするも、猶お難を免れず。況や交疎の士に於いてや。興化の王守 公（岳正）を夢みて覺めて祠を立つ。論者 以爲らく靈爽 耿耿たり、守を待ちて白なり。竊かに謂えらく、夢とは、魂魄の暫く交わり、文とは、精神の久しく聚まるものなり。然らば則ち公（岳正）の文を傳うるは、猶お立祠に勝るがごとからざらんや（俞長城「題岳蒙泉稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之三・十葉・「岳蒙泉稿」条）。

①楊雄の「解嘲」に「或いは〔虞卿のように〕立談して侯に封ぜらる（或立談而封侯）」。

拙稿では、『孟子』梁惠王上の「孟子見梁惠王」章の「不遠千里而來」を題目とする岳正の八股文を検討してみたい。題目は、『孟子』梁惠王上の太字で示した箇所である。

孟子見梁惠王，王曰，叟**不遠千里而來**，亦將有以利吾國乎，

（朱注）梁惠王，魏侯瑋也。都大梁。僭稱王。諡曰惠。史記，惠王三十五年，卑禮厚幣以賢者。而孟軻至梁。叟，長老之稱。王所謂利，蓋富國彊兵之類。

大賢遠涉於梁，梁王有深幸焉，

夫賢如孟子，梁王所願見而不可得者也，一旦輕千里而來，誠厚幸哉，

昔梁王卑禮厚幣^③，大招天下謀臣畧士，而深幸於孟子之來也，故庭迎之曰，叟，天下士也，寡人所日夜切心而願奉社稷以從者也，第叟處東鄙，寡人處西鄙，地之相去，千有餘里^⑤，亦云遠矣，遠則寡人之庭，宜無叟之迹矣，

①願見而不可得：『孟子』公孫丑下に「王就見孟子曰，前日願見而不可得，得侍同朝甚喜，今又棄寡人而歸……」。

②輕千里而來：『孟子』告子下に「夫苟好善，則四海之内，皆將輕千里而來，告之以善」。朱注に「輕，易也。言不以千里爲難也」。

③卑禮厚幣：『孟子』梁惠王上「孟子見梁惠王」条に朱注に「『史記』（魏世家）惠王三十五年，卑禮厚幣以招賢者，而孟軻至梁」。

④奉社稷以從：『史記』蘇秦傳・『戰國策』齊策一/楚策一/韓策一に「奉社稷以從」。

⑤地之相去，千有餘里：『孟子』離婁下に「舜……東夷之人也。文王……西夷之人也。地之相去也，千有餘里」。

今竟不計夫道路之阻長^①，而遠涉於異邦，

又不鄙夫寡人之愚不肖，而惠臨於敝邑，

- ①道路之阻長：『詩經』秦風・蒹葭に「遡洄從之，道阻且長（遡洄して之に従わんとすれば，道 阻にして且つ長し）」。

自我文公，創霸於全晉之日，則憑軾^②而來者，有狐・趙^③諸君子，而今且絶足於寡人之國矣，叟何間關列國，儼然辱而庭教之，而不憚夫千里之遙也，

自我文侯，下交於分晉之日，則結駟^④而來者，有田・ト^⑤諸君子，而今且絶跡於寡人之都矣，叟何偏顧羣侯，惠然辱而遠臨之，而不恤夫千里之勞也，

- ①全晉：『漢書』地理志・『史記』貨殖傳に用例ある。「晉が全盛の日」の意味か。
 ②憑軾：『左傳』僖公二十八年に「君馮軾而觀之（君 軾に馮きて之を觀よ）」。
 ③狐・趙：狐偃と趙衰。
 ④儼然辱而庭教之：『戰國策』秦一に「今先生儼然，不遠千里而庭教之」。また、『孔子家語』屈節解に「越王郊迎，而自爲子貢御，曰，此蠻國之國，大夫何足儼然辱而臨之（越王 郊迎して，自ら子貢の爲めに御して曰く，此れ蠻國の國。大夫何ぞ儼然として辱くも之に臨むに足らん，と）」。
 ⑤田・ト：田子方とト商。

豈天下無邦^①，叟將擇邦於千里之外，而僅得之梁耶，

豈天下無君，叟將擇君於千里之遠，而獨注意寡人耶，

- ①天下無邦：『易』否卦象傳に「上下不交而天下無邦也」。

不然，是天所以幸梁而賜之叟也，

是叟所以幸梁而賜之來也，

梁其厚幸哉，

- ①天所以幸：『戰國策』秦三に「此天所以幸先王，而不棄其孤也（此れ天 先王に幸いして，其の孤を棄てざる所以なり）」。『史記』范雎傳も同じ。

卒之不仁義是言，而汲汲於利之圖，此孟子不遠千里而來，終不遠千里而去也，

噫^①（『制義文統類編』第一體・「不遠千里而來 岳正」条）。

- ①噫：殖學齋編訂『舉業辨字』（不分卷・歎語辭第六・三十二葉）に「痛傷する所有るの辭なり」。

明の張居正の『四書直解』は，この題目の箇所を次のように解説する。

叟は，是れ長老の稱なり。如今の老先生と稱すると一般なり。惠王 一た

び孟子に見えて、即ち叟と説う。你^い 鄒^{なんじ}より梁に至る。千里の遠きを憚らずして来る。何れの計策有りて、以て寡人の國を利益せんとす可きや（『四書集註直解』上孟・卷十四・梁惠王章句上・「王曰、叟不遠千里而來、亦將有以利吾國乎」条・一葉）。

清の康熙帝御定『日講四書解義』（康熙十六年〔一六七七〕刊）では、朱注を加味して次のように理解する。

此の一章は書して是れ人君と爲る者は當に躬から仁義を行うべきを言うなり①。梁の惠王 名は瑩、本は魏侯なり。大梁に都し、僭して王を稱す。諡して惠と曰う。因りて之を稱して梁の惠王と曰う②。昔、孟子^{みず} 道を抱きて自重し、諸侯に見えず。梁の惠王 「禮を卑くし幣を厚くして、以て賢人を招く」③。孟子 因りて之に見ゆ。蓋し道を行なうの計が爲めなり。惠王 孟子を一見し、因りて之に問うて曰く、叟 鄒より梁に至る、遙遙千里④、乃ち其の遠きを憚らずして来る者は、亦た將に奇謀善策有りて、以て寡人の國を利せんとす可き有らんとするや。惠王の此の言、但だ利有るを知るのみ、乃ち己の私の爲めなり……（『日講四書解義』卷之十三・孟子上之一・「王曰、叟不遠千里而來、亦將有以利吾國乎……」条・二葉）。

①『孟子』梁惠王上・「孟子見梁惠王」章・「未有仁而遺遺其親者也，未有義而後其君者也」条の朱注に「故人君躬行仁義，而無求利之心，則其下化之，自親戴於己也」。

②『孟子』梁惠王上・「孟子見梁惠王」条の朱注に「梁惠王，魏侯瑩也。都大梁。僭稱王。諡曰惠。『史記』（魏世家）惠王三十五年，卑禮厚幣，以招賢者。而孟軻至梁」。

③ ②参照

④韓愈「嗟哉董生行」詩に「東に馳せて、遙遙千里、休む能わず」。

『四書直解』・『日講四書解義』ともに、

〔叙講〕時に惠王 急ぎて富強を圖らんとし、孟子に問うて曰く、叟 千里の遠きを憚らずして梁に来る。亦た將に以て寡人に教えること有りて、寡

人の國もて富み兵もて強からしめ、以て大いに吾が國に利すること有らんとするか（雍正十一年〔一七三三〕刊『殖學齋編訂四書大全』孟子卷之一・二葉）。

という理解であったと考えられる。

趙國麟はこの題目を孟子がやってきたのを幸いとして、梁の惠王が自慢したい気持ちがあり、そのために孟子に質問したものである、と言う。

其の来るを幸いとし之に問う。賛し以て自ら矜る①の意有り。故に問を為して兼ねて賛す（『制義文統類編』第一體・「不遠千里而來 岳正」条・岳二）。

①『史記』太史公自序に「……惠王自矜，齊・秦攻之（惠王 自ら矜り，齊・秦 之を攻む）……作魏世家第十四」。

そして、岳正の八股文は、次のように展開される。まず、破題を「大賢 遠く梁に涉り、梁王 深き幸い有り」と破き、それを承題で「夫れ賢なること孟子の如きは、梁王の見わんこと願いて得可からざる所の者なり、一旦 千里を輕しとして来るは、誠に厚き幸ならんや」と承ける。起講で「昔し梁王 禮を卑くし幣を厚くし、大いに天下の謀臣畧士を招き、而して深く孟子の来るを幸いとするなり、故に之を庭迎して曰く、叟は天下の士なり、寡人の日夜切心にして社稷を奉じて以て従わんと願う所の者なり、第だ叟は東鄙に處り、寡人は西鄙に處り、地の相い去ること、千有餘里、亦た遠しと云うも、[ほんとうに] 遠ければ則ち寡人の庭、宜しく叟の迹無かるべし」と言う。

そして、提股は「今、竟に夫の道路の阻長を計らず、遠く異邦に渉る／又た夫の寡人の愚不肖を鄙しとせず、敝邑に惠臨す」とし、孟子が魏（梁）にやって来たことを言う。

中股で「我が〔晉の〕文公、霸を全き晉に創めるの日より、則ち軾に憑きて来る者、狐〔偃〕・趙〔衰〕の諸君子有り、而れども今且に足を寡人の國に絶つ、叟 何ぞ列國に間わり關し、儼然として辱くも之を庭教し、而して夫の千里の遙を憚らざらん／我が〔魏の〕文侯、交を晉を分かつの日に下してより、則ち結鞶

(引き綱を結ぶ) して来る者、田(田子方)・ト(ト商)の諸君子有り、而れども今且に跡を寡人の都に絶つ、叟^{あまね} 何ぞ羣侯を徧く顧みて、恵然^{かたじけな}として辱くも遠く之に臨み、而して夫の千里の勞を恤^{うれ}えざらん」と言い、晉の文公や魏の文侯の時には、君子がやって来たが、いまは訪れて来ない。そうした中、孟子がわざわざ魏にやって来てくれたこと言う。

後股で「豈に天下 邦無し、叟 將に邦を千里の外に擇び、而して僅かに之を梁に得ん／豈に天下 君無し、叟 將に君を千里の遠きに擇び、而して獨り寡人に注意せん」とし、天下に邦や君がないところ、特に魏と恵王を選んでくれたと述べる。

收股で「然らざれば、是れ天の梁に幸いし、之を叟に賜う所以なり／是れ叟の梁に幸いし、之に来るを賜う所以なり／梁 其れ厚き幸なるかな」と述べ、孟子が魏に来てくれたのを大いなる幸いであるとする。

そして、收結は、「卒^{つい}に仁義ならざるを是れ言い、利の圖るに汲汲たり。此れ孟子の千里を遠しとせずして来り、終に千里を遠しとせずして去るなり、噫^{ああ}」と結び、恵王が仁義を持ち出さず、利益のみを言ったために、孟子は去って行ったと言う。

趙國麟によると、起講の「寡人所日夜切心、而願奉社稷以從者也(寡人の日夜切心にして、社稷を奉じて以て從わんと願う所の者なり)」の二句は、孟子がやってきたのを幸いであるとする生根伏脉(いとぐち)となるだけではなく、題目から截去された「利吾國(吾國を利すること)」三字の本質をあわせているという。

「寡人所日夜切心[而願奉社稷以從者也](寡人の日夜切心にして、社稷を奉じて以て從わんと願う所の者なり)」の二句は、獨り深く其の来るを幸いとするの生根伏脉①と為るのみならず、「利吾國」の三字の神理を并す。^{すべ}都て已に透起②す。妙なること甚だし(『制義文統類編』第一體・「不遠千里而來 岳正」条・岳二)。

①生根伏脉：『制義綱目』に「樹 必ず根有り。根 立ちて、樹 生ず

可し。泉 必ず脉有り。脉 得て、泉 出ずる可し。夫れ樹・泉
地上に出で、根・脉 地中に隠る。必ずしも樹・泉の形有らざるも、
已に樹・泉の本を得れば、則ち生根伏脉の妙を能くするなり……
（『制義綱目』 不分卷・八十九葉）。

②透起：『斯文規範』に「透は通なり、過なり。講じて此の處に在るも、
彼の處の精神或いは字句 已に豫め先ず通じ過ぎ去くを言うなり」
（『斯文規範』 卷之五・四葉・「一曰透起」条）。

さらに、收結では、題目から截去された下文の意味をまとめ、そして「不遠千里而去（終に千里を遠しとせずして去るなり）」とするのは、起講の「深幸孟子之来（深く孟子の来るを幸いとするなり）」と対応しているだけでなく、朱注の「禮を卑くし幣を厚くす」ことをも明らかにしていると言う。つまり、道のために梁にやって来て、また道を守るために去っていったことを示している。これは、細心に注を読み込んだことによる、と趙國麟は考えるのである。⁽¹⁾

斷結（收結）の處は下文を総括し、「不遠千里而去（千里を遠しとせずして去るなり）」と説き及ぶは、獨り起處（起講）の「深幸孟子之来（深く孟子の来るを幸いとするなり）」と相い應じて章法を作るのみならず、集注の「禮を卑くし幣を厚くす」云云を見ず。是れ孟子 道の為にして来り、道を守りて去る、謀臣策士の比に非ず。此れ古人の細心に註を読み、識力絶人の處なり。然らざれば、朱子の此の註を疑い孟子を卑視するを為すに幾し（『制義文統類編』 第一體・「不遠千里而來 岳正」条・岳二）。

(1) 『四書大全』の朱注の「卑禮厚幣以賢者。而孟軻至梁」条は、『四書或問』（孟子或問・卷一）を節略して引用し、次のようになっている。

問う孟子 諸侯に見えず、其れ惠王に見ゆるは何ぞや、と。朱子 曰く、諸侯に見えざるは、先ず往きて見えざるなり。惠王に見ゆるは其の禮に答うるなり。先王の禮は、未だ仕えざれば、諸侯に見ゆるを得ず。〔戦国の〕時の士 自重するもの鮮し、而れども孟子 猶お此の禮を守る。故に居る所の國は、未だ仕えざれば、必ず君 先に就きて見ゆ、然る後に往きて見ゆ。異國の君は越境するを得ず、必ず禮を以て焉を先にし、然る後に往きて其の禮に答うるのみ。『史記』 其の事の實を得、と（『四書大全』 孟子集註大全・卷之一・梁惠王章句上）。

趙國麟は、朱子のこの発言をふまえて、「細心に註を読み」と述べたのではないだろうか。

このように、岳正のこの八股文も題目の朱注に基づいて書かれているといえるのではないだろうか。

なお、趙國麟によれば、もともとのこの八股文の提股の出比は、「今竟不計夫千里之勞，而遠涉於梁邦（今，竟に夫の千里の勞を計らず，遠く梁邦に渉る）」となっていたという。ただそれでは、題目の「不遠千里而來」を説きつくしてしまうことになり、後の部分が付け足しとなり、提股の對比の「又不鄙夫寡人之愚不肖，而惠臨於敝邑（又た夫の寡人の愚不肖を鄙しとせず，敝邑に惠臨す）」も蛇足になってしまうとする。そうこうするうちに、「今竟不計夫道路之阻長，而遠涉於異邦」と改定されたものを見つけ、それにしたがうことにしたという。

凡そ大開の後の合に轉ずる〔提股の〕處は、必須く渾を用うべし。〔そうすれば〕方^{まさ}に能く通篇の氣を引き、一絲もて到底（つらぬきとおせる）なり。若し明らかに題句を出だせば、便ち直盡（直ちに盡してしまう）を犯し、題文もて兩つとも慳^{たた}くの病有り。此の文の原本〔の提股の出比〕に「今竟不計夫千里之勞，而遠涉於梁邦」と云う。是れ已に題面を將^もって説き盡す。獨り後面の數比は皆な是れ剩語なるのみならず、即ち下〔の提股の對比〕の「〔又不鄙夫〕寡人〔之〕愚不肖」の二句も已に蛇足と成る。後、舊選を訪ねて、忽ち此の改本を得。瑕去りて瑜全し。此れ程・朱の『大學』を更訂するが如し。所謂ゆる「功 作るに倍す」（『朱子語類』卷三十四・論語十六）なり。正に古本を以て詞と為すを得ざるなり。今，竟に改本に依り，其の説を申べ以て附す（『制義文統類編』第一體・「不遠千里而來 岳正」条・岳二）。

いま、改定された提股の「今竟不計夫道路之阻長，而遠涉於異邦」を検討してみると、「道路之阻長」で題目の「千里」を渾冒（渾然とおおう）し、「梁邦」を「異邦」に変える。これは、題目の「不遠千里」の部分述べている。また、對比の「又不鄙夫寡人之愚不肖，而惠臨於敝邑」は題目の「來」を述べている。こうした提股の展開は、題目を二つに分けるものの、直截的に述べるのではなく、後の中股・後股・收股を引き出しているというのである。

「改定された提股を検討してみると」「道路之阻長」は「千里」字を渾冒

- ✓ (2) 『制義文統類編』(第一體・「不遠千里而來 岳正」条)では、提股のところに頭注があり、「以上一開，以下一閣（合）」となっている。趙國麟は起講までを「開」とし、提股以下を「閣（合）」となっていると理解したようである。趙國麟の『制義綱目』では、開閣（合）の意味を次のように解説する。

此の意を明らかにせんと欲し、先ず彼の意に即して以て之を發するを開と曰う〔割注①〕。既に彼の意を明らかにし、忽ち前の意に接し以て之を印すを合（閣）と曰う〔割注②〕。合無ければ、則ち開を爲す所無し。開無ければ亦た以て合を見す無し〔割注③〕。故に分かちて之を論ずるに、開は引に似たる有り〔割注④〕。神理は能く照らすを貴ぶ〔割注⑤〕。合は釋に似たる有り〔割注⑥〕。神理は能く應ずるを貴ぶ〔割注⑦〕。合わせて之を論ずるに、開は宜しく平頭直起（句の頭を同声でそろえる）すべからず〔割注⑧〕。合は宜しく無根（根拠なく）して自ら轉ずべからず〔割注⑨〕。開は宜しく装頭（あたまの序となる部分）は太はだ重くするべからず〔割注⑩〕。合は宜しく實を顧みて太はだ繁なるべからず〔割注⑪〕。兩截の局を以て、倒綱の法を用う〔割注⑫〕。會にして之に通ず。斯れ能く神にして之を明らかにす（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・二十九葉）。

割注①：「孝弟」は「爲仁之本」（『論語』學而）と爲すを明らかにせんと欲して、先ず「君子務本」を發す、[また]「致中和」（『中庸』第一章第五節）の效を明らかにせんと欲して、先ず「中和之徳」を發するが如き、是なり。

割注②：「孝弟也者」（『論語』學而）と「致中和」（『中庸』第一章第五節）の「致」字とは、皆な忽として上文に接するが如き、是れなり。

割注③：聖賢の言は、皆な實理あるなり。合を以て之を形わせば、方に其の開を知る。開無ければ、則ち皆な合のみ。

割注④：引は正意有り。開は主意有り。如し主意の上文に已に有る者なれば、則ち上を領して以て本題に入る。如し上文の主意無き者なれば、則ち當に主意を暗にかきだ提して以て本題に入る。題の來去は皆な當に主意を以て主と爲し、題もて實と爲すべし。入題の後、當に題を以て主と爲し、主意もて實と爲すべし。故に引に似たる有り。

割注⑤：照とは、下を照らすなり。下文の爲めに本を張るを作る、是れなり。

割注⑥：釋の根に祖宗の別有り。合の脉に遠近の分有り。或いは先ず遠脉に接し、後に開より轉入す。或いは先ず開より入り、後に遠脉に接して説き來る。故に釋に似たる有り。

割注⑦：應とは、上に應じ、上文と酬對を作る、是れなり。

割注⑧：合を提し開を生ずる能わざれば、則ち起處 便ち平直（平易で素直）の病有り。

割注⑨：開の處は生根（根本となる部分）合わす能わざれば、則ち合の處は便ち無根の病有り。

割注⑩：開を敘して太はだ重ければ、便ち實を以て主を壓えるの病有り。

割注⑪：頻頻と開を顧みれば、便ち煩擾を爲す。惟だ股頭・股尾 略ぼ照顧（注意）を作せば可なるのみ。

割注⑫：合を提し開を生ずは、開に由りて合に轉ず。開は須く合を照らすべし。合は須く開を顧みるべし、是れなり。

(つづく)

23 頁 商輅 → ①商輅

32 頁 (三) 正統年間
陳獻章 → ②陳獻章